

コンゴ民主共和国キヴ地方の昔話

ヒョウとシタトゥンガ

語り手：ムンゾンギ・ベンバ
挿し絵：訳：ふしはら のじこ



あるところに、とても商売上手なヒョウがいました。ヒョウはシタトゥンガ（アンテロープの一種）と同じ村に住んで、商売は街でしていました。

ヒョウが持っているヤギは1頭だけでしたが、シタトゥンガはたくさんのヤギを持っていました。

ヒョウはこう思っていました。「シタトゥンガのやつはヤギをたくさん持っているが、兄貴分の俺は1頭だけだ。しかもそいつはオスだから子どもを増やすこともできない」

そこである日、シタトゥンガのところへ行こう言いました。

「おいシタトゥンガくん、俺は旅に出るのでしばらくヤギの面倒を見てくれないかい。この辺りは泥棒が多いからよく見張ってくれよ」

「ええ、いいですとも」

シタトゥンガは快く引き受けました。

ヒョウは旅から戻ると、シタトゥンガのところへ子どもを使いに出しました。

「弟分のシタトゥンガのところへ行行って、ヤギを返してもらって来るんだ。俺のヤギはメスヤギを産んで、ヤギは2頭になっているからな」

ヒョウの子どもがシタトゥンガのところへ行くと、シタトゥンガは預かったヤギを自分のヤギと間違えないように、別の場所で世話をしていました。シタトゥンガはヒョウの子どもの話を聞くと、驚いて言いました。

「ばかな、君のお父さんが預けていったヤギはこのオスヤギだぞ。オスヤギが子どもを産んだりするもんか」

そんな訳で、いざこざが始まりました。

「おいシタトゥンガ、おまえは俺の弟分だから争いたくはないんだ。早いとこ俺のヤギと生まれた子どもをよこしな」

とヒョウは言いましたが、シタトゥンガはこれに応じる訳はありません。そこで、裁判をすることになりました。裁判の場には、あらゆる動物たちが集まって来ました。ヒョウは自分の言い分をとうとうと述べました。シタトゥンガも負けずに自分の言い分をみんなに話して聞かせました。

双方の話が終わると、動物たちは2匹から離れた場所に集まって相談しました。

「ヒョウが理にかなっていないのは明らかだ。でもそんなことを言ったら、みんなヒョウに殺されてしまうだろう。それに比べシタトゥンガは怖いやつではない。あいつはヤギをいっぱい持っているから、メスヤギ1頭ヒョウにやってもどうってことはない。これならシタトゥンガだけの被害ですむ」

誰もヒョウといざこざを起こしたくなかったのです。ところがカメとダイカーは反対しました。

「我々には鋭い牙も強い力もないが、公平な心もないのかい」

けれど動物たちは、ヒョウとシタトゥンガのところに戻ると、こう言いました。

「シタトゥンガお前が悪い。我々はヒョウのヤギが妊娠していたのも、子どもを産んだのも知っている。ヤギはオスだがメスヤギを産んだと認める。さあヤギを連れて帰るんだ」

「ええっ！そんなことが」

シタトゥンガは驚いて叫びましたが、仕方なくメスヤギとオスヤギを連れて来まし

た。その時ダイカーが飛び出して来ました。

「えーっ！おじさんか、おじさんが、おじさんがー」

「どうしたんだい、どうしたんだい？」

「おじさんが死にそうなんだ」

「なんで死にそうなんだい？」

「知らない間におじさんが妊娠してしまったんだ。こどもが生まれそうなのに、なかなか出てこないんだ」

ヒョウはびっくりして飛び上がりました。

「ダイカー、なんだって？」

「ほんとうだよ、おじさんが死にかけているんだ。陣痛が来ているのに子どもが出てこないんだ。どうすればいいか分からないんだ」

「おいダイカー、おまえマリファナでも吸ったのか？頭がおかしくなったのか？男が子どもを産むだって、どうやって妊娠するんだ、まったく」

そこへカメが出てきました。

「ヒョウさん、ほんとうですよ。ダイカーのおじさんは妊娠しました。子どもがなかなか産まれなくて、医者も手の施しようがないのです。もう死ぬだけです。ほんとうのことです。さあ一緒におじさんの様子を見に行きましょう」

ヒョウは頭を何度もたたいて言いました。

「ダイカーがなんだって、なんだって」

ダイカーは言いました。

「おじさんを見てごらんよ、私のおじさんを。私の母と同じ母から生まれたおじさんだよ」

ダイカーはなおも続けて言いました。

「理屈にあわないでしょう。道理は通さなくちゃいけない。さあ自分のヤギだけを取って、メスヤギはシタトゥンガに返しなさい」

ほかの動物たちも自分たちのしたことを恥ずかしく思いました。ヒョウは自分のオスヤギだけを連れて帰りました。

おはなしこれでおしまい。